



徳川家康公顕彰四百年記念 日韓国交正常化50周年記念 朝鮮通信使講演会・ 徳川みらい学会第2回講演会



徳川時代に再開した朝鮮通信使は旧暦の1607年6月20日、大御所家康公に謁見したと言われています。また、前日の6月19日、家康公は清水港に船を浮かべ、清見寺潮音閣にて朝鮮通信使をもてなしたと言われています。これに倣い、本年6月19日に朝鮮通信使講演会・徳川みらい学会第2回講演会「朝鮮通信使と日韓友好促進」を駐横浜大韓民国総領事館との共催で開催しました。当講演会では、徳川宗家第18代当主の徳川恒孝氏の特別講話のほか、小説家辻原登氏と韓信大教授の河棕文氏の講演を行い、徳川みらい学会の会員など約450人が参加しました。

徳川恒孝氏からは「秀吉が亡くなつ



その後、家康公は早いタイミングで朝鮮半島から兵を引き上げ、朝鮮と国交を回復した。また東南アジアでも国交の樹立を始めていて、家康公はオープンな考え方を持っていた。清見寺には朝鮮通信使からの素晴らしい書や詩が多数ある。朝鮮通信使が滞在した清見寺で、現代においても詩の競作などやってみてはどうか」という提案がありました。



徳川 恒孝 氏

また辻原登氏の講演では、「秀吉の朝鮮出兵以来泥沼化していた日朝関係を、家康公がさまざまな方法で改善し、朝鮮通信使をはじめとした外交の足場をつくった」と述べられました。また、朝鮮通信使を題材にした自

身の小説「韃靼の馬」や森鴎外の「佐橋甚五郎」に触れ、何らかの理由で朝鮮に残留・帰化した日本人が、朝鮮通信使に混じり込んでいた可能性などにも言及されました。



辻原 登 氏

「400年前の通信を甦らせよう」と題して講演した河棕文氏からは、昨年の内閣府の調査で「韓国に親しみを感ずる」と答えた人の割合が5年前から半減したことが紹介され、一方、韓国でも「日本を侵略者として描き、ナシヨナリズムをあおり立てる映画やドラマが放映されている」と両国の関係悪化を危惧されました。「このような時にこそ、朝鮮通信使が実現した文化交流やお互いの配慮と尊重をモ

デルとし、共に生きる日韓のような取り組みを、政府レベルではなく民間レベルで静岡から始め、日韓を軸とした新しい東アジアの平和体制を築いていってほしい」と望まれました。



河 棕文 氏

講演会終了後には清見寺にて「瓊瑤（けいよう）世界の夕べ」と題し懇親会を開催しました。清見寺には朝鮮通信使がかいた書画などが多数残っており、鐘楼には「瓊瑤世界」と書かれた扁額があります。「瓊」も「瑤」も玉のことで、2つの玉は互いに光を照らし合うことを意味しており、日韓友好への思いが込められているものです。参加者は家康公が関係修復に努めたことに思いを馳せ交流を深めました。



（文責…企画広報室）